

金子皓彦先生と骨董市での愉快的時間

金子先生と出会ったきっかけをずっと思い出しているのですが、実ははっきりとは覚えていないのです。まさに今年の流行語大賞にもなりそうな「記憶にございません」ですね。気がついたらいつの間にかお友達になっていた。恋愛映画のような劇的な出会いではなかったのですが、男同士ですからその程度がよろしいかと。

もう 20 年以上も前になるでしょうか。今よりもっと和ガラスやカメラ集めにアツクなっていた僕は、毎週末のように各地の神社やお寺の境内などで開催される骨董市に出かけていました。豆腐屋さんや牛乳配達のお兄さんでもないのに朝の 3 時か 4 時には起きて。

と言うのも、まだ暗いうちに現場に着いていないと、その筋のライバルたちはすでに業者さん等と商談し始めているのです。とにかく早いもの勝ちの世界。知り合いの業者さんが荷物を広げる前に「今日は何かオモシロイものはありますか?」「珍しいモノは?」なんて何軒も回らなくては良いものは手に入らないので、そりゃあ気合いも入ります。毎年コンサートツアーをしながらもそんな週末が何年も続いたのでしょうか。当然のように早朝にやって来る人たちとも顔見知りになります。でも集めているものも違えば、名前も仕事もお互いに知らないし、知ろうともしない。みんな自分の掘り出し物探しで精一杯。自分のライバル以外は興味もわかないし、目もくれない。

金子先生ともそんな関係がしばらく続いていたのでしょうか。何となく顔は知っている、いつも戦利品の入ったビニール袋をいっぱい抱えている白髪交じりの初老のオジサマ。そんな印象だったと思います。いつどこで、どうやって、どちらから声をかけたのか (5 W1H じゃありませんが)、何がきっかけだったのか……。う〜ん、全然覚えてない (笑)。

しかし仲良くさせていただいてからの記憶、これは確かです。例えば、毎月 1 日の町田の骨董市では国道沿いの不二家のモーニングセットを一緒にとるようになる。金子先生が某有名女子短大の先生だと知った時は、大学の研究室におじゃまして、先生のコレクションを見せていただく (研究室といっても奥のほう、半分以上はご自身の寄木コレクションでした。公私混同とは正にこの事!!)。

その大学で、先生の無茶ぶりで 90 分だけ授業をやらせていただいたことがある。悩んだ末にカラオケの歴史について講義しました。女子大生ばかりでドキドキ。先生の知り合いのステーキ屋さんではいつもステーキを食べまくる（先生と言えば僕より年配なのに凄い食欲！）。毎月のように業者市場で一緒に競りに参加し、山のような荷物をそれぞれの車に積み、帰りに箱根に寄って観光する（意味がわからない〔笑〕）。

まだまだあります。一番凄かったのは大学を退職されてからの、その膨大なコレクションの行き先です。小学校の体育館よりもデカイ倉庫。まだモノを入れる前に一緒に伺ったことがあります。先生曰く「ここだったら坂崎さんのコレクションや荷物などもたくさん入るから、いずれ持ってきちゃえばイイよ」。それから数か月後だったでしょうか。次に伺った時は入り口から一番先の壁まで、足の踏み場もないくらいビッチリ埋まっておりました。「先生これじゃあ僕のモノは何にも入らないですよお」「だね」でおしまいです。でも何が凄いてこの莫大なコレクション、何がどこにあるのか、ほぼ覚えているのが先生の真骨頂。自分が好きで集めたモノへの愛情が半端じゃないのです。

実は僕はあまり先生のコレクションについては詳しくもないし、さほど興味もないのですが（スンマセン！）、先生のコレクション自慢話を聞くのが好きなのです。勉強になることもたくさんあるし、それより何よりも先生の情熱とスケールの大きさ、少年のような純粹さ。モーニングセットやステーキを頬張りながら、そんな話をお聞きする機会が何度もありました。

今回、金子先生がコレクションの本を出されるということで、友人代表として一言のはずが、申し訳ありません、書いているうちについつい長くなってしまいました。乾杯の音頭や朝礼の挨拶も短いに越したことはないとわかってはいるつもりだったのですが、先生とのエピソードが多いもので。まだまだあります。ある時、廃業してしまった寄木細工の工房を丸々買ってしまおうというので、ワンボックスカーを借りてきて、二人で大汗かいておおよそ家一軒分の荷物を運び出したり……。もうイイですね！

お目汚しの最後にひとつだけ。先生のコレクションがこのような本になりますと、これがバイブルになります。そうなると寄木細工一つひとつの価値、平たく言えば値段（相場）が高騰し、以前はあんな値段で買ったのに、

どうしてこんなに高くなったんだ？となることでしょう。そこで骨董屋さん曰く「金子先生の本に載っているんだから間違いなくイイものだよ。先生が保証しているようなものだ」。ほ～ら、先生自身の首を絞めることになったでしょ(笑)。

でももうモノを増やさなくてもイイんじゃないですか、先生？

僕も人のことは言えませんが、お互いにそろそろこの膨大なモノたちの行き先を決めなきゃいけないお年頃なのですから。

もちろん先生の辞書には「断捨離」という言葉はないとわかってはいるつもりなんですけどね。

前後してしまいましたが、金子先生、ご出版おめでとうございます。これからも先生らしく、ますますお元気で!!

THE ALFEE 坂崎幸之助

目次

金子皓彦先生と骨董市での愉快的な時間……………	2
THE ALFFE 坂崎幸之助	
工芸品に魅せられて……………	8
日本輸出工芸研究会会長 金子皓彦	
寄木細工と木象嵌……………	18
対談：鈴木康弘（箱根町立郷土資料館館長）	
明治の輸出陶磁器……………	74
対談：花井久穂（茨城県近代美術館美術課主任学芸員）	
輸出漆器としての駿河と会津の漆工芸……………	98
対談：小林公治（東京文化財研究所広領域研究室長）	
麦わら細工と貝細工……………	126
対談：藤塚悦司（大田区立郷土博物館学芸員）	

横浜芝山漆器（芝山細工）……………	156
対談：宮崎輝生（芝山師、横浜マイスター）	
横浜観光物産……………	178
対談：石崎康子（横浜開港資料館主任調査研究員）	
骨董市主催者に学ぶ骨董の面白さとコレクションの育て方……………	200
竹日忠芳（骨董商、株式会社骨董市代表取締役）	
特別鼎談 コレクターの楽しさと使命……………	210
丘みつ子（女優・陶芸家）	
未吉敏道（コレクター）	
金子皓彦（日本輸出工芸研究会会長）	
学兄・金子皓彦著『西洋を魅了した「和モダン」の世界』の出版を祝って……………	218
茨城大学名誉教授・土浦市立博物館館長 茂木雅博	
あとがき……………	220



工芸品に魅せられて

日本輸出工芸研究会会長 金子皓彦

収集の始まりはきれいな小石

私は箱根に生まれ、小田原の小学校と中学校に通っていました。小学3年生の頃には、近くの河原できれいな石を拾い集めていました。小学校高学年の頃でしょうか。学校の授業で土器の話聞き、野山を歩き回っては土器の破片を拾い集めました。その頃から物を拾い集めるのが大好きで、「考古学って面白そうだな」と思っていました。

いろんなものを集めてはポケットに入れ、家に持って帰ってきていたのですが、「そんな泥だらけのものを持ち込まないで!」「ポケットに穴が空いてしまうからやめて」などと、親には怒られてばかり。それでもせっせといろんなものを持ち帰っては洗い、部屋に置いていました。私の部屋は2階にあったのですが、おそらく集めたものの重量は優に500kgを超えていたことでしょう。なにせ、石や土器など重いものばかり集めていましたから。

昭和32年(1957)に明治学院高等学校に進学後も、私の収集癖はとどまるどころを知りません。午前中で授業が終わる土曜日には、品川駅から2駅先の大森によく遊びに行きました。目当ては大森貝塚。当時は人家も囲いもな



く自由に入出入りできたので、散らばっていた土器片や貝殻などを拾っていました。集めているうちに疑問がわきますから、国立科学博物館の当時は地学課長だった尾崎博先生や、國學院大学の樋口清之先生のところを訪ねていきました。樋口先生は考古学の世界で大変名を馳せた研究者で、新聞やテレビ、著書などでよく見知っていました。私がいきなり先生の研究室を訪ねたにもかかわらず、とても快く対応してくださっ

は大変な幸運だったのです。

考古学研究に話を戻すと、樋口先生が私を様々な場所に派遣してくれ、考古学に関する調査研究の経験を積ませてくださったおかげで、多くのことを学びました。今、考古学を学ぼうとすると、例えば縄文時代の土器専門といったように研究対象が細分化されます。でも、当時は旧石器時代から江戸時代まですべてを学びました。それに先生の、「誰かに質問された時、わかりませんと答えてはいけません。なんでも考えて答えるべきです」という教えもありましたから、私はそれに従い、どの時代のどんなものでも見に行きましたし、研究を続けました。そのかいあって自分の視野がどんどん広がっていくことを実感しました。

もう一つ、先生が教えてくださった大切なことは、骨董としての見方と資料としての見方という二つの視点からモノを見るということです。骨董の見方というのは、主に美術的、工芸的な視点で優れているかどうか、価格が高いかどうか、などで判断されます。資料的見方では、それがい



樋口先生が私のために奈良のお寺の古材で彫ってくださった仏像。お顔が樋口先生にそっくりで、初対面で思わず声を上げてしまいました。

つどこで誰がどういう目的、技術で作ったのかを明らかにし、人の暮らしと歴史と文化を解明していきます。この両方の視点で工芸品を見られるようになったのは、私にとっての強みになりました。

骨董の目利き修業

樋口先生は優れた考古学者でしたが、その一方で熱心な骨董コレクターでもありました。授業のない時など、「金子君、ちょっと小田原に行きましょう」なんて声をかけてくださり、二人でよく骨董店巡りをしました。樋口先生が品定めをして買われるところを目の当たりにしましたし、その後、先生の





卓面を本体から引き出した所。



脚部側面の収納扉裏に樹皮を張っている。

寄木細工 ライティングビューロー／箱根

明治時代

幅 241.0（拡張テーブルを開いた状態）× 奥行 75.3 × 高さ 181.0cm

本体は高さが上 54cm、中 54cm、下 73cm の三段の組合せである。開閉式支え板を開き、下段に内蔵した拡張テーブルを翼のように左右に引き出すと全幅は 241cm を測る。日本で作られた寄木細工の中で、私の見た限りでは最大の作品である。机としての機能に加えて収納のための家具でもあり、引き出しは 30 杯を数え、ほかに儉鈍扉 2、引き違い扉収納部 4、開き扉収納庫 5 があり、また書棚 2、飾棚 1 を配して装飾性を高めている。書棚の床や開扉の裏張りに樹皮を貼っているのは、この技法が流行った時期（明治 20～30 年頃）と産地（箱根）を示唆している。

学兄・金子皓彦著
『西洋を魅了した「和モダン」の世界』
の出版を祝って

日本輸出工芸研究会会長の金子皓彦先生は、私の大切な先輩である。私は学生時代から先生の主催した考古学的調査に何度も参加させていただき、ご指導を受けた。例えば、小田原市下曾我遺跡・川崎市馬絹古墳・栃木県益子城跡等は忘れられない遺跡である。さらに中国敦煌石窟やベゼクリク千仏洞では、砂漠の厳しい環境の中での旅を楽しんだことも若い頃の思い出である。

金子先生は恩師・樋口清之博士の薫陶を受けて博物館学に造詣が深く、特に資料の収集・保管について、母校國學院大学および東京女学館大学で40年以上、学生の指導に当たり、学界の重鎮を成している。

その一方、寄木細工、木象嵌、芝山細工などの工芸品、麦わら細工や貝細工などの民具について、日本のみならず世界中を股にかけて調査にあたられ、20万点以上もの貴重な工芸品・民具を収集し、それらは「金子コレクション」と呼ばれて国内外に知られている。

特に静岡や箱根の寄木細工・木象嵌については、製品は言うにおよばず、製作に関わる各種工具類も大量に収集され、民俗資料としての価値は、わが国の重要民俗資料に匹敵する価値を有している。さらに近年は寄木細工ならびに芝山細工の研究家としてトルコ政府関係機関から招聘され、若い研究者の先頭に立って調査・研究をされておられる。

芝山細工については、すでに明治時代初期に横浜に生産地が移り、ご当地千葉県芝山での生産が途絶えて久しい。先生は、これを寄木細工・木象嵌とともに積極的に研究され、その調査結果を家具道具室内史学会ほかで発表されたり、横浜開港資料館、たばこと塩の博物館で展示紹介するなどして、今まであまり顧みられることがなかった近代の輸出工芸における芝山細工に光を当てておられる。

また、これらの工芸品や民具を収集、展示するなかで知り合った地方自治体関係者らと協力して展覧会や講演会を開催し、各地で行われている“町おこし”に協力されるなど、自らの経験を実地に生かしたユニークな活動も行

なっておられ、そのバイタリティあふれるご活躍に感服している。このように、先生の学問研究は広く深いですが、理論に走らず、実学にもつなげている点
が特徴である。

このたび、三樹書房から豊富な写真を添えた本書が刊行され、収集された
様々な資料について、先生の深い学識からの解説を読ませていただき、楽し
みながらそれぞれの資料の歴史的背景や収集に至る経緯を知ることができ
た。幕末・明治から昭和時代にかけて無名の作者によって作られた工芸品や
民具が、先生独特の史観によって紹介されており、わが国の近代史研究に新
たな分野の風を吹き込んでいる感じを受けた。先生の平易な言葉で解説され
た優れた近代史の著書が生まれたことを、歴史研究者の一員として嬉しく思
うとともに、一人でも多くの読者に読んでいただきたいと念じている。

茨城大学名誉教授・土浦市立博物館館長 茂木雅博

あとがき

子供の頃からの収集癖が高じて、いつの間にか寄木細工のほか、近代日本の輸出工芸品を中心に20万点にもおよぶ資料が集まってしまいました。今回、こうした資料を通じて知り合った方々から、「ぜひ、金子コレクションについて紹介した本をまとめて欲しい」との要望（脅し?）を受け、三樹書房から多大なご協力を得て刊行に至った次第です。

「和モダン」は最近、使用されることが多くなった言葉です。わが国では近代に入り、和（和風）を基調としながら欧米人が驚いた独特の意匠と技術を合わせ持つ様々な工芸品が作られ、それらを総称してジャポニスム（ヨーロッパにおける日本趣味）の作品と呼ばれています。しかし、そうした外国からの評価ではなくて、われわれの祖先が長い歴史の中で培ってきた美意識をもっと認識すべきではないか、という気持ちもあり「和モダン」という言葉をあえて使いました。ことさらにこの言葉にこだわるわけではありませんが、半世紀以上にわたって集めた数々のコレクションには「お洒落で華麗な和の世界」が底流にあるという考えからでもあります。

コレクションのなかから、主に近代日本の輸出工芸品を中心に紹介しましたが、この本を通じて少しでも日本の民具や工芸品——そのなかには美術工芸品と呼ばれる高価な品ではなく、知らぬ間に打ち捨てられてしまう身近な民芸品や土産物も含む——に興味を持って向き合う人が現われることを期待しています。

しかし、そんなに堅苦しく考えず、自分の好きなモノを骨董市や古美術店を巡って楽しみながら集めていくうちに、いつしか、その分野でスペシャリストと呼ばれるようになり、博物館や美術館で展示できるくらいの数と情報が集まったという経験を持つ、「あるコレクターの体験談」として読んでいただけたら幸いです。

謝 辞

本書の巻頭を友人の坂崎幸之助さんに飾っていただき、なんと光栄なことでしょう。お陰さまで本書の輝きが増し、何より掲載作品のすべてが大喜びしています。信じてもらえないと思いますが、私ほど収集の病が重いと、寄木細工や焼き物などと会話ができるようになります。

THE ALFEE 秋の全国ツアー直前のお忙しいなか、文章を寄せていただきありがとうございました。同じく学友で、茨城大学名誉教授・土浦市立博物館館長の茂木雅博氏には、本書の出版にあたり玉稿をいただきありがとうございました。

さらに本書制作にあたり、対談・鼎談の相手としてご登場いただいた皆様のほか、鼎談の会場をご提供いただいた株式会社鈴木廣蒲鉾本店代表取締役社長の鈴木博晶氏、資料の整理と写真撮影の場所を確保いただいた諸星グループ最高経営責任者の諸星重文氏に心より感謝とお礼を申し上げます。

また、あちらこちらに飛び交う会話の内容を、簡潔にして要を得た文章にまとめていただいたライターの吉川明子氏と島田ゆかり氏、すばらしい写真を撮影していただいた、てるうちスタジオの照内潔氏と堀弘子氏、本書のデザインを担当していただいたデザイナーの金原明彦氏、そして三樹書房の木南ゆかり氏、山田国光氏に大変お世話になりました。ここに厚くお礼を申し上げます。

金子皓彦

金子皓彦

(かねこ・てるひこ)

1941年神奈川県生まれ。

1964年國學院大学文学部史学科卒業。

卒業後、國學院大学考古学資料室学芸員として勤務し、1985年に東京女子大学短期大学(2002年に4年制大学となる)に移り、考古学と博物館学を教授する。そのかわら、寄木細工、木象嵌、芝山細工、陶磁器、麦わら細工、貝細工などの工芸品や民具の調査と収集に努め、20万点にもおよぶ資料をコレクションしている。また、日本輸出工芸研究会会長として、展示会開催・講演・執筆活動を行なっているほか、NHK「美の壺」や「ラジオ深夜便」に出演するなど、近代日本の工芸史に関する幅広い発信活動は、国内外で高い評価を得ている。

現在、日本輸出工芸研究会、寄木細工研究会、江戸麦わら細工研究会の会長ほか、大和市文化財審議会会長、座間市文化財保護委員会会長、座間市市史編纂委員会会長、座間市郷土資料館整備事業検討委員会会長、御殿場市深沢城跡保存および活用懇話会会長等を務める。

西洋を魅了した

「和モダン」の世界

明治・大正・昭和に生まれた輸出工芸品 金子皓彦コレクション

著者 金子皓彦
発行者 小林謙一
発行所 三樹書房
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-30
TEL 03(3295)5398
FAX 03(3291)4418

印刷・製本 シナノ パブリッシング プレス

© Teruhiko Kaneko/MIKI PRESS

本書の内容の一部、または全部、あるいは写真などを無断で複写・複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者及び出版社の権利の侵害となります。個人使用以外の商業印刷、映像などに使用する場合はあらかじめ小社の版權管理部に許諾を求めて下さい。落丁・乱丁本は、お取り替え致します。